

京都大学人文科学研究所国際研究ミーティング実施報告書

1. 国際研究ミーティングの名称

日英バイリンガルワークショップ「Techniques of the Shichōsha: On the Technoscientific Formation of Cultural Subjects / 〈視聴者〉の系譜:ある文化的主体の科学技術的形成」

2. 主宰責任者氏名

Hsiung, Hansun (英国 Durham 大学准教授)

3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

①日時:2023年 6月17日 10:00~17:00

場所:京都大学人文科学研究所本館・総合研究4号館・共通3講義室

- 河西棟馬(東京工業大学講師)「高柳健次郎の「無線遠視法」研究:「遠視」とは何か？」
- 岡澤康浩(京都大学助教)「注視せざるものたちの科学:視聴者のメディア論と人間工学の交錯」
- Hansun HSUING (Durham 大学准教授)「The “Quest for a ‘Seeing’ Machine”: Frogs, Jūdō, and the Origins of Deep CNNs」
- 大久保遼(明治学院大学准教授)「操作者の視覚:科学万博とコンピュータ・グラフィックス」
- 高部遼(東京大学博士課程)「〈表面〉を見る吉田喜重:テレビ・ドキュメンタリー番組『美の美』シリーズについて」
- 小城大知(東京大学修士課程)「クリス・マルケル作品における観客の視聴行為の変遷について:受動的視聴から能動的体験へ」
- 難波阿丹(聖徳大学准教授)「デジタル・マーケティング戦略における「触覚的知覚」制御:メディア消費とアテンション・エコノミーの変貌」
- 基調講演 1: Alexander ZAHLTEN (Harvard 大学教授)「Continuity, Rupture, and the Ecological Collapse: Shichōsha and the Question of Time」(Discussant: 飯田豊 立命館大学教授)

②日時:2023年 6月18日 10:00~15:00

場所:京都大学人文科学研究所本館・総合研究4号館・共通3講義室

- Adam BRONSON (Durham 大学准教授)「Observing the Observers: Opinion Polling and Televisual Temporality in the Twentieth Century」
- Martyn SMYTH (Sheffield 大学講師)「Orchestrated listening? Managing the Sonic Worlds of the Japanese Sound Hunter」
- 永田大輔(明星大学常勤講師)「視聴者集団としてのオタクとビデオ利用:アニメファンがテレビ文化を趣味にすることが可能となるプロセスに着目して」
- 基調講演 2: 喜多千草(京都大学教授)「国民生活時間調査と「視聴者」」(Discussant: Takuya TSUNODA Columbia 大学助教授)

4. 概要(400字程度)

本ワークショップは、テレビ技術の歴史をたどることで、科学技術論とメディア論にまたがる学際的なアプローチを探究することを目的として、開催された。この目的を果たすために、10名の個別発表に加え、一日目は基調講演者には、技術の重要性を強調するドイツ・メディア論の影響下で映画論を展開するアレクサンダー・ザルテン氏を迎え、指定討論者にはテレビのメディア技術史の研究を続けてきた飯田豊氏(立命館大学)を迎え、メディア論と技術史との対話を行った。二日目にはコンピューター史を専門とする技術史家であると同時に、NHKに勤務した経験のある喜多千草氏(京都大学教授)を基調講演者を迎え、指定討論者には

岩波の科学映画を研究するなど、映画史と科学技術史との境界で活躍している角田拓也氏(コロンビア大学助教授)を迎えた。当日は、科学技術史、メディア史・書物史、映像文化論、音響文化論、映画史、テレビ史など、多種多様な背景をもつ参加者を迎えることができ、コロンビア大学や京都大学の大学院生など若手研究者も参加する、分野をまたいだ研究会となった。

5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

別添のリスト参照

6. 助成金の使途等

国内旅費、基調講演者および指定討論者への謝金、水・コーヒー代

7. その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

学際的対話、特に技術史と映像文化論・メディア論が比較的近い問題関心を共有していることが明らかになるなど、異分野交流がすすんだ。また複数の方から今後のイベントへの問い合わせを頂くなど、強い関心を引き起こせた。今回の会合で浮かび上がったテレビアーカイブの議論などをテーマとした会合が企画され、また出版・発表の場として英語圏でのさらなる展開を提案されるなど、今後に繋がるみのあるものとなった。

参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	2 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	4 (0)	0 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)
学内(法人内) ※人文研を除く (内女性)	1	8 (4)	1 (0)	0 (0)	3 (0)	3 (0)	16 (8)	1 (0)	0 (0)	6 (0)	6 (0)
国立大学 (内女性)	1	9 (2)	0 (0)	3 (1)	2 (0)	2 (0)	16 (4)	0 (0)	6 (2)	3 (0)	3 (0)
公立大学 (内女性)	1	2 (1)	1 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	4 (2)	2 (0)	0 (0)	2 (2)	2 (2)
私立大学 (内女性)	1	8 (3)	0 (0)	4 (2)	0 (0)	0 (0)	12 (5)	0 (0)	8 (4)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	1	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	1	13 (5)	13 (5)	1 (0)	4 (3)	4 (3)	25 (9)	25 (9)	2 (0)	8 (6)	8 (6)
その他 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
学外 計	5	35 (0)	14 (0)	8 (0)	7 (0)	7 (0)	62 (0)	27 (0)	16 (0)	13 (0)	13 (0)
計	7	45 (15)	15 (5)	9 (3)	10 (4)	10 (4)	82 (28)	28 (9)	18 (6)	19 (8)	19 (8)
【その他の参加状況】											

※()内には、女性数を記載

※受入機関、受入人数、延べ人数を区分に応じて記入してください。

※外国人、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)、大学院生の人数はそれぞれ受入人数、延べ人数に対しての内数を記入してください。

※受入人数、延べ人数については上段に総数を下段に()で女性の内数を記入してください。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。

※【その他の参加状況】には「その他」区分に計上した、具体的な所属等を記載してください。

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください。

(例) 国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した : 受入人数2人、延べ人数6人